

市販薬乱用・依存の現在

乱用・依存患者の動向（2022年 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患実態調査）

- 危険ドラッグ乱用鎮静化の後、精神科医療にアクセスする薬物関連精神疾患患者数はむしろ増加。
- とりわけ**2016年以降、市販薬関連障害患者数の増加が顕著。**

市販薬乱用・依存患者の臨床的特徴（宇佐美・松本, 精神医学, 2020）

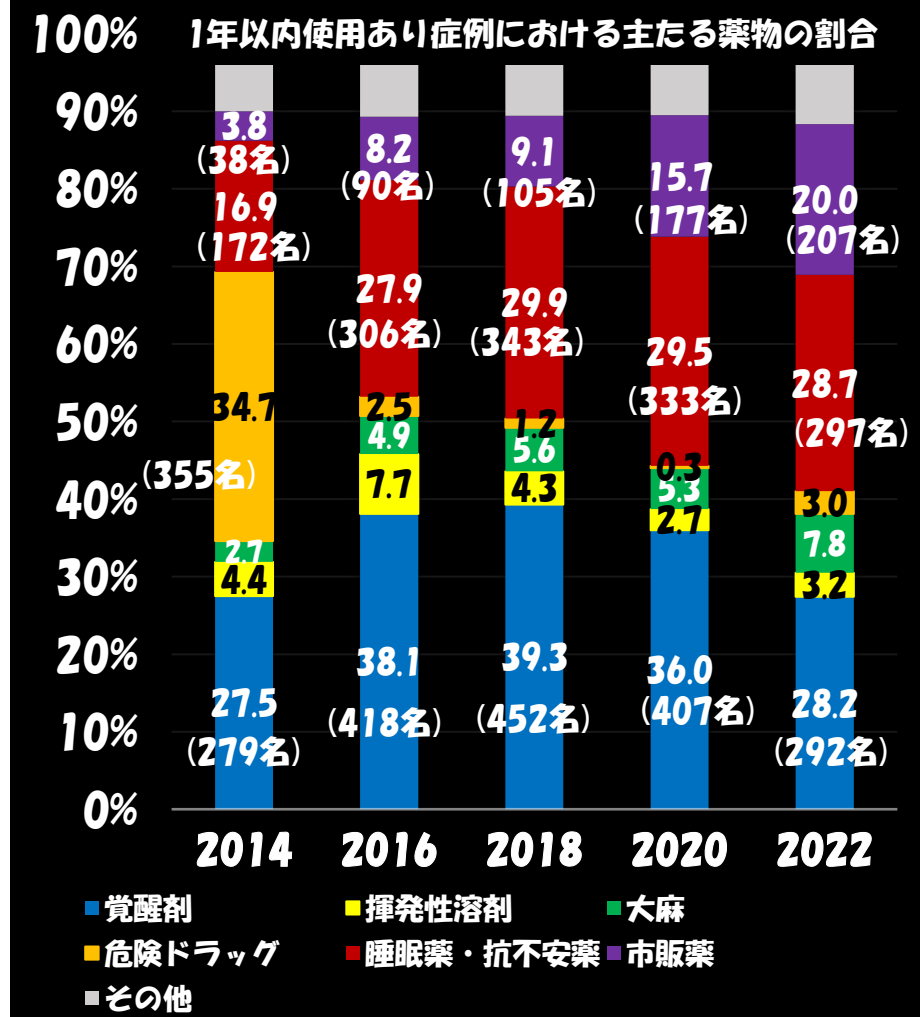
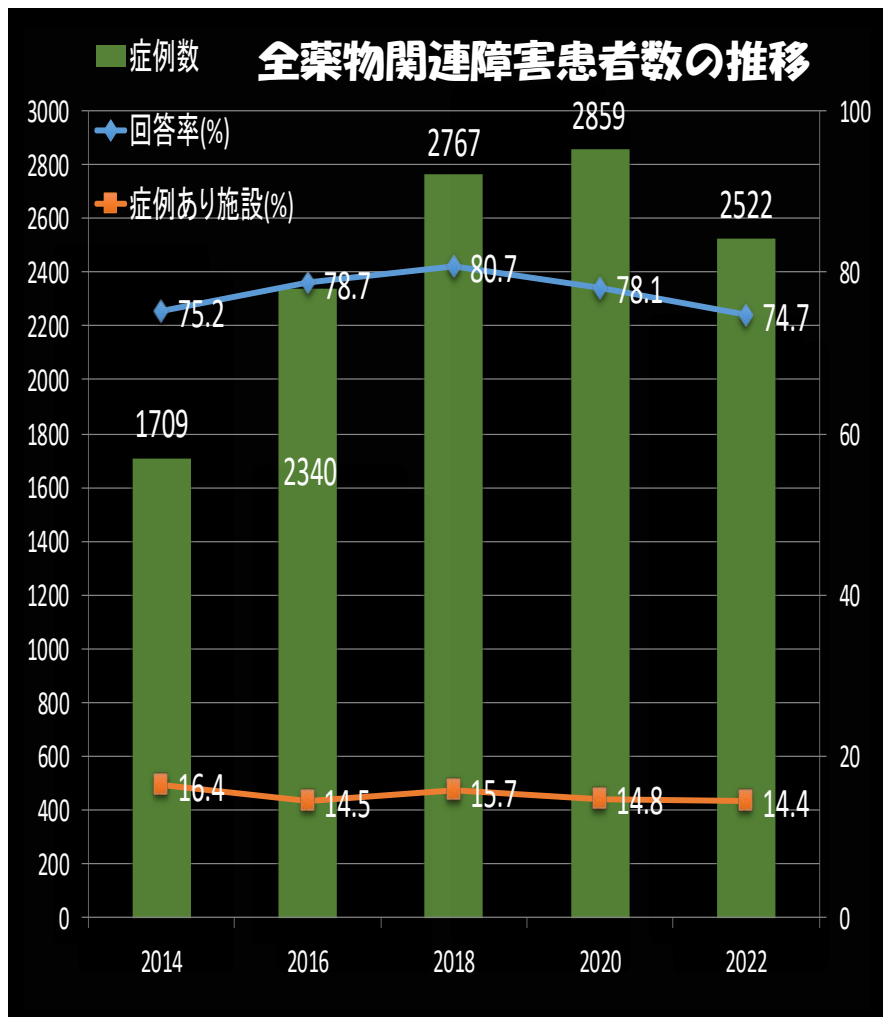
- **10～20代の女性に多く、怠学傾向や非行傾向がなく、一般青年と変わらない生活背景**を持っており、薬物問題の専門家であっても、外見・挙動で購入目的を識別することは困難。
- しかしその一方で、**ストレスやトラウマに関連する心因性精神障害（ICD-10 F4）や、自閉スペクトラム症などの発達障害（ICD-10 F8）を併存している者が多い。**
- 快感を求めて使用しているというよりも、**心理的苦痛の緩和のために使用している。**
 - **ジヒドロコテイン連日大量使用者の場合、離脱時に抑うつ気分の悪化や自殺念慮の出現を呈しやすく、医学的管理を要する場合がある（松本, きょうの健康, NHK）。**

入手経路・使用薬剤（2022年 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患実態調査）

- 患者の多くは「**店舗**」から購入している（薬局**71.5%**、店舗**22.2%**、インターネット**16.4%**: 複数回答あり）。
- 乱用製品としては、**鎮咳薬・感冒薬**が圧倒的に多い
- 最近1年以内に使用の見られた市販薬関連精神障害症例207名中、乱用製品としては、多い順に、**コテイン含有群（メチルエフェドリン・ジヒドロコテイン含有製品等）150例（73.5%）、フロムフレリル尿素主剤群34例（16.7%）、テキストロメトルファン含有群30例（14.7%）、アリルイソプロピルアセチル尿素含有群23例（11.3%）、ジフェンヒドラミン主剤群18例（8.8%）であった。**

「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査」 最近1年以内に薬物使用が認められた症例 主乱用薬物の割合と患者数の推移

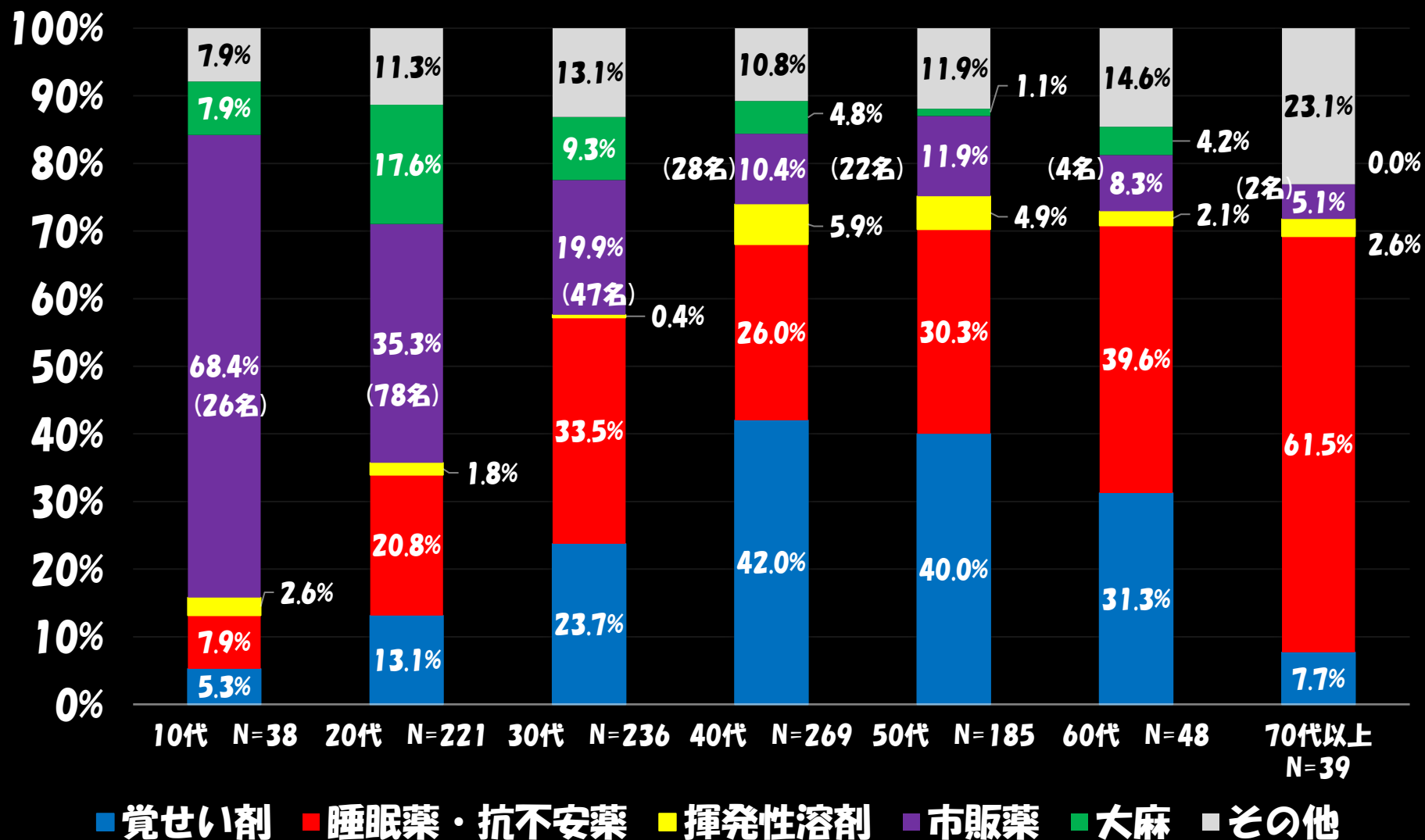
調査年の9～10月に有床精神科医療施設で治療を受けた全薬物乱用・依存患者のデータ



「1年以内に薬物使用あり」症例1036例における年代別「主たる薬物」の割合

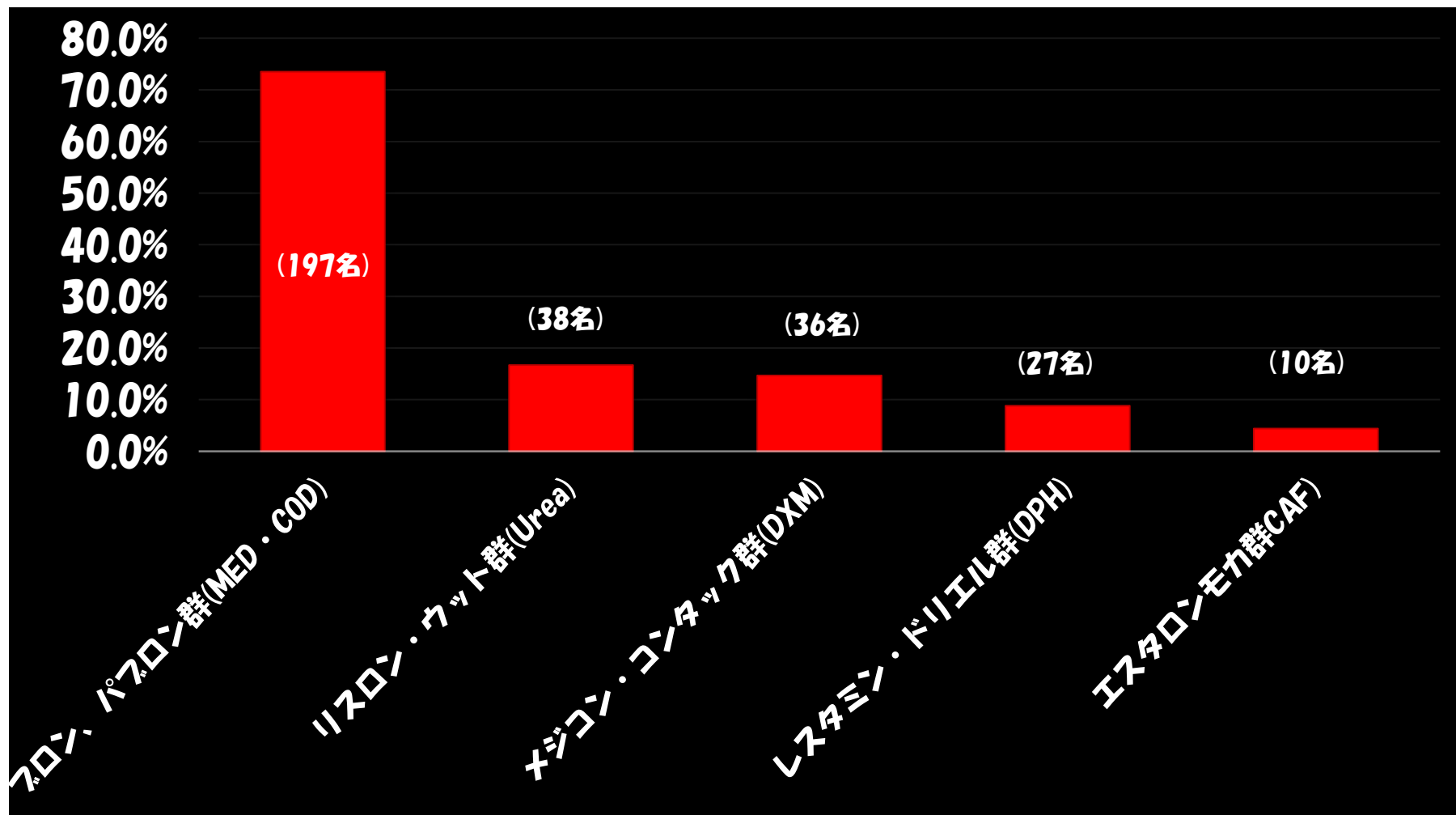
「2022年 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査」

有床精神科医療施設で2022年9～10月に治療を受けた全薬物乱用・依存患者を対象とした調査



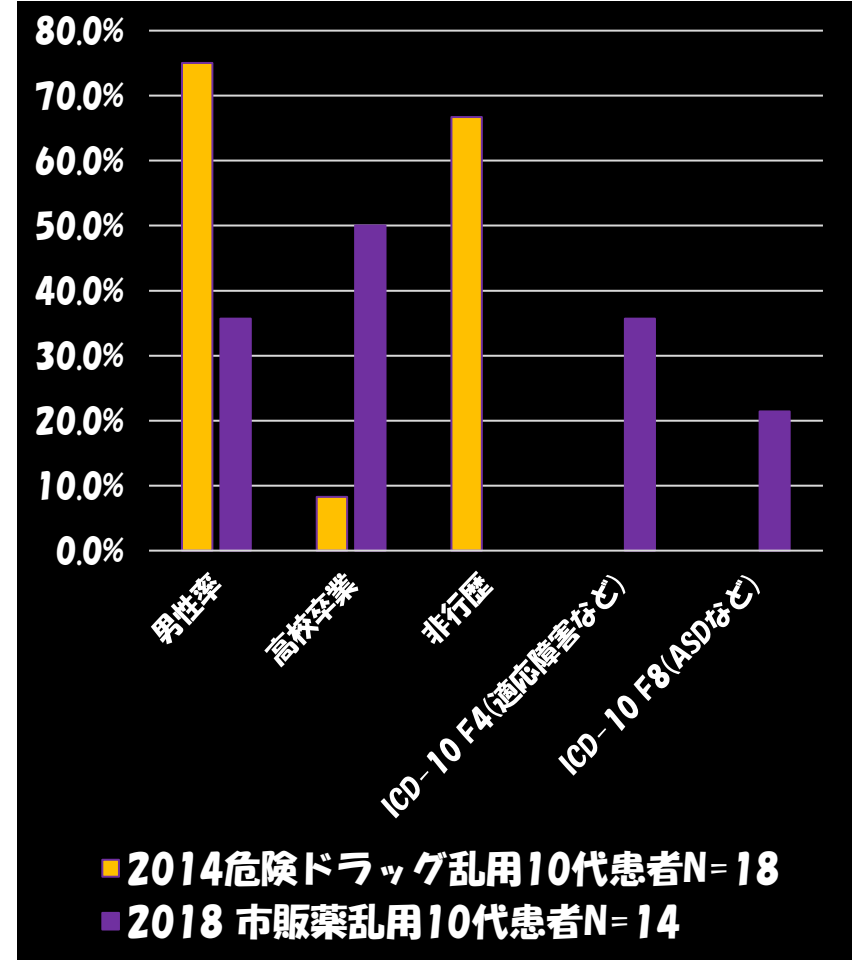
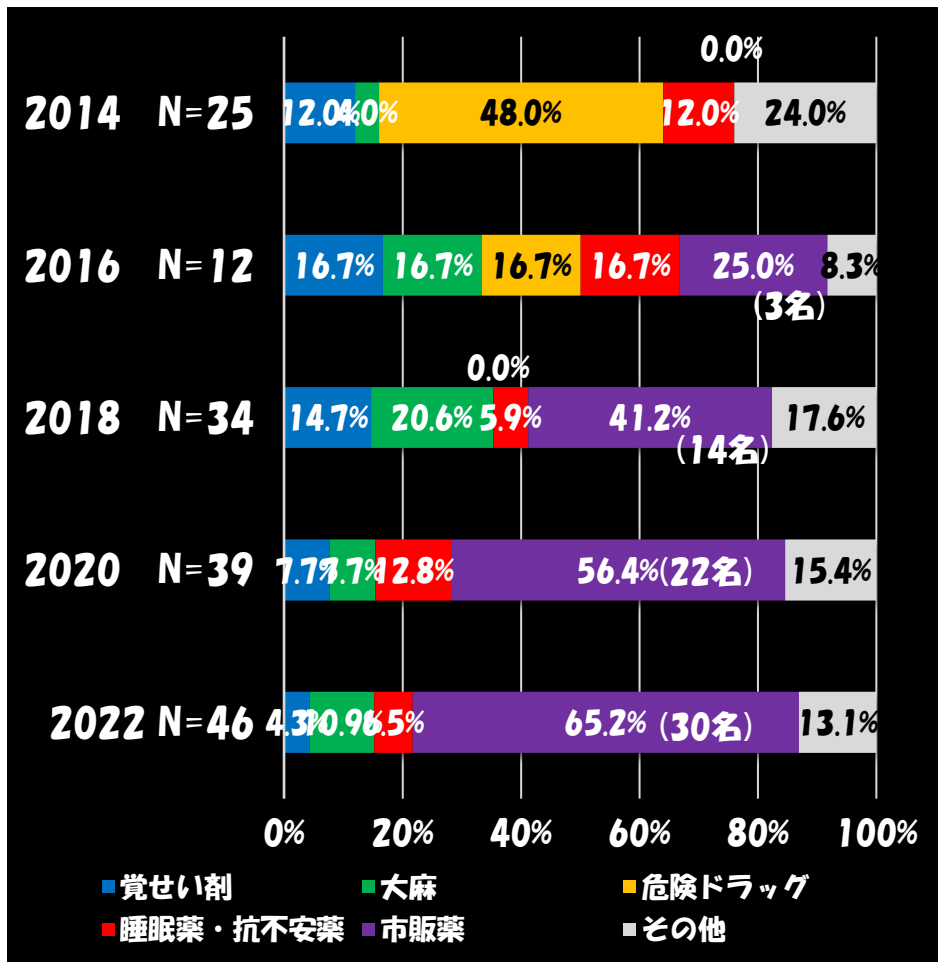
市販薬関連障害患者273例が選択したOTC製品

「2022年全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患実態調査」



十代女性で増えているOTC乱用

(松本俊彦「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患実態調査：調査年の9～10月の2ヶ月間に有床精神科医療施設で治療を受けた全薬物乱用・依存患者のデータから、10代症例のみを抽出)



規制強化施策の限界

- ① 対処療法に過ぎないが、販売個数制限には一定の効果はある
- ② 一方で、販売個数制限を行っても、乱用対象を他の医薬品へと切り替える

・ 1980年代末

・ 企業の自主的対策:

- ・ フロン液乱用エピテミックに対して、製薬メーカーが「**フロン液剤**」の成分から**メチルエフェドリン**（覚醒剤原料）、**ジヒドロコテイン**（麻薬性鎮咳成分、劇薬指定）を除去
 - ・ この成分変更により全体として乱用エピテミックは鎮静化した（妹尾栄一, ほか: 市販鎮咳剤の乱用に関する社会精. 神医学的研究 成分変更にもなう乱用動. 態の変化, 精神神経学雑誌 98: 127-150, 1996)
 - ・ しかし臨床現場では、依然としてメチルエフェドリンとジヒドロコテインを含有する「**フロン錠剤**」を販売されており、重篤な依存症患者はこの錠剤を使用継続している自体に品番に遭遇してきた

・ 2014年

・ 厚労省 販売個数制限・用途等確認対象製品の指定

- ・ 「**メチルエフェドリン**、**ジヒドロコテイン**を含有する**鎮咳薬**」として、フロン錠剤の販売個数制限を通知

・ 上記規制後における臨床現場での変化

- ・ 乱用者は、同成分を含有し、販売個数制限のない「**感冒薬**」のパフロンゴールドを使用
⇒**肝機能障害などの健康被害者の出現**（薬物依存症外来における臨床実感）

・ 2023年

・ 厚労省 販売個数制限・用途等確認対象製品の拡大

- ・ 「**メチルエフェドリン**、**ジヒドロコテイン**を含有する**感冒薬**」も販売個数制限対象となる
- ・ フロモバレリル尿素含有睡眠薬も新たに対象になった一方で、**メジコン**は対象に入らなかった

・ 現在の状況

- ・ 乱用者はメジコン、レスタミンなどを使用（薬物依存症外来における臨床実感）

市販薬乱用・依存対策

クスリという「モノ」への対策だけでなく、クスリを使う「ヒト」への対策も必要

Supply Reduction 供給低減: 乱用リスクのある市販薬を若者から遠ざける

- 政府
 - メジコンの販売個数制限対象に（乱用頻度の高さについて十分なエビデンスあり）
 - ウットなど、危険性ゆえに医療機関で長く使用されていない薬剤を市販することの見直し（エビデンスはないが臨床経験より有効と考えられる）
- 製薬企業
 - 過剰摂取しやすい「壘」売りの中止⇒PTPシート化へ（臨床経験より部分的な効果があると考えられる）
 - 1箱あたりの錠剤数削減（英国におけるエビデンス: *Hawton et al, BMJ, 2001*）
- 販売店舗
 - 販売個数制限（臨床経験より部分的な効果があると考えられる）
 - 用途確認、身分確認、年齢確認などの購入時確認（エビデンスなし）

Demand Reduction 需要低減: 市販薬を必要とする若者を減らす

- 乱用防止啓発
 - 違法薬物に偏った薬物乱用防止教室の内容見直し（「ダメ。ゼッタイ。」からの脱却: 米国におけるエビデンス: *Ennett et al, How effective is drug abuse resistance education? A meta-analysis of Project DARE outcome evaluations, Am J Public Health, 1994*）
 - 再乱用防止のための介入（自殺のハイリスク群としての対応が必要）
- 原則的対応
 - 「正直に話せる関係を保つ」
- 情報提供
 - 社会資源（精神保健福祉センター、LINE相談、若者支援団体）の紹介・リーフレット配布（エビデンスはないが臨床経験より有効と考えられる）
- 専門医療
 - 薬物依存症専門医療機関紹介（**急な断薬は危険。ジヒドロコチンの離脱は自殺リスクを高めうる。医学的管理下での漸減が必要**）
 - （注）ジヒドロコチン: 鎮咳作用を持つオピオイド系中枢神経抑制物質。延髄の咳嗽中枢に直接作用し、鎮咳作用を発揮する。鎮咳作用はモルヒネの約1/3、コチンの約2倍、精神機能抑制作用・催眠作用及び呼吸抑制作用はモルヒネの約1/4、コチンと同等といわれる。
 - （注）地域の薬物依存症専門医療機関: NCASA 依存症対策全国センターのホームページ（<https://www.ncasa-japan.jp/>）より、「全国の相談窓口・医療機関を探す」のボタンをクリックすると、各都道府県・政令指定都市の専門医療機関を調べることが可能。

NCASA 依存症対策全国センター

<https://www.ncasa-japan.jp/>




迷いから、決断、そして回復までの道のりを
包括的に支援する社会へ

トピックス

トピックス一覧

11月5日14日・20日はオンライン等

- 2023/2/21 3月8日（水）「依存症の理解を深めるためのトーク&ライブイベント in 東京」が開催されます。
- 2023/2/21 3月4日（土）「特別授業！みんなで学ぼう依存症のこと in 大阪」が開催されます。

 **全国の相談窓口・医療機関を
探す** >

 **自助グループのご紹介** >

 **支援者の皆様へ** >

コロナ禍前後における乱用市販薬の変化

デキストロメトルファン含有鎮咳薬乱用者が増加している

(Usami et al, in preparation: 全国精神科医療施設実態調査の再解析)

